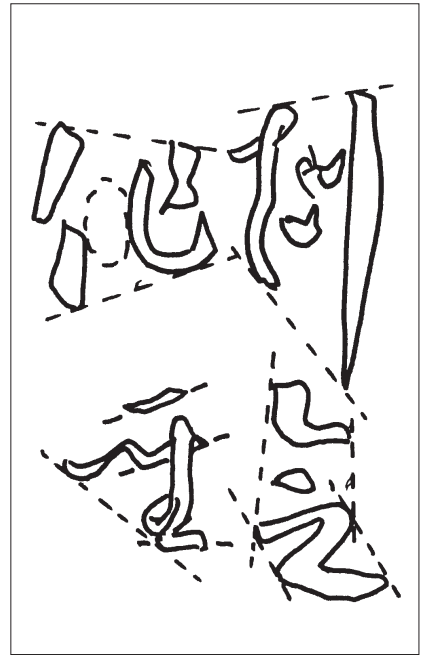


◆半紙二行たて書きに臨書して下さい。出品料440円



草書千字文・唐 懷素

1、字句⇨剋念作聖

2、形式⇨半紙タテ使用。右に「剋念」、左に「作聖」と臨書し、左余白に「○○臨」と調和を工夫して書き入れる。

3、概観⇨行草では虚画が自然と多くなるように思います。しかし、懷素の千字文をみると、草書として成立するために必要な最小限度の点画(実画)だけで書かれているものが多い。虚画があるところは一切書かないか、たとえ、虚画があるにしても最小限度にとどめている。このことが、千字文の形が簡素に感じられるゆえかと思われま。草書の代表作「十七帖」と「書譜」と比較してみます。

4、各字のポイント(※図版の各字の大きさは調整してあります)

情 懷素 千字文 唐書

情 王羲之 三井本 東晋 十七帖

情 孫過庭 諸唐書

剋 偏と旁の懸針対比が見事。偏は筆圧に変化ないが、旁の懸針は中央に押しゆき、収筆では引き上げる。

念 文字の外線(⋮)を結んでみると、右から左へ、左から右へと動いているのがわかる。虚画のない簡潔な形となる。

作 偏と旁も最小限の実画のみにて表現、偏と旁の間に十分余白を取る。

聖 前字までとは打って変わって細線による表出。収筆の横画は、上部に対して右に下げてバランスを取っている。

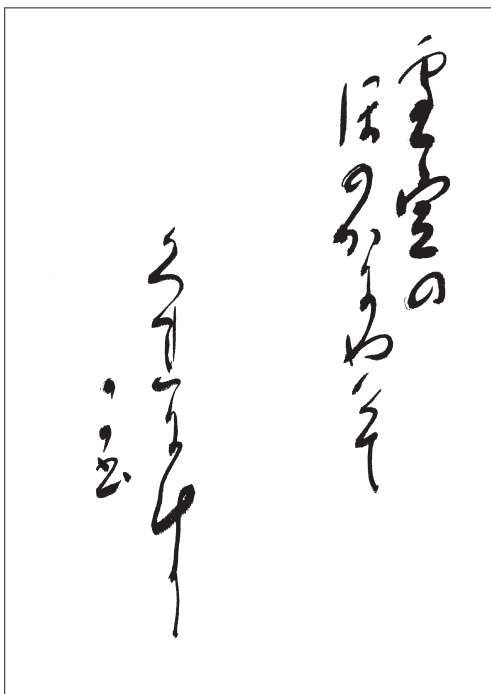
半紙課題(予告) (一月二十二日締切)



平岡華雪先生書 冬嶺孤松秀づ(陶潜)

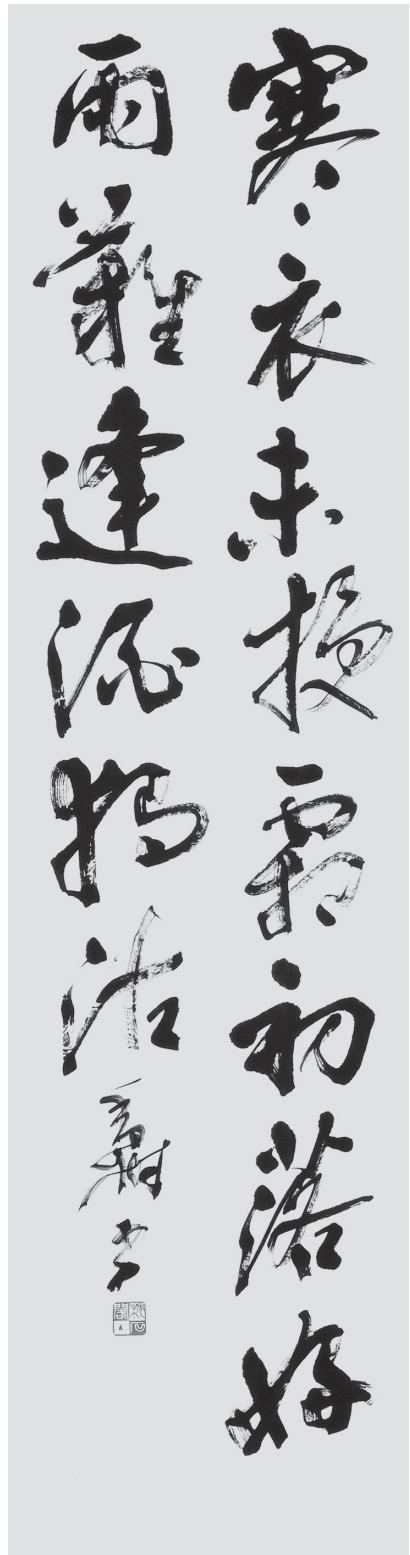
訳：冬の山嶺に一本松が秀でている。

平岡華雪先生書 雪空のほのかに焼けて暮れにけり(都穂)



A 高橋香樹会長書

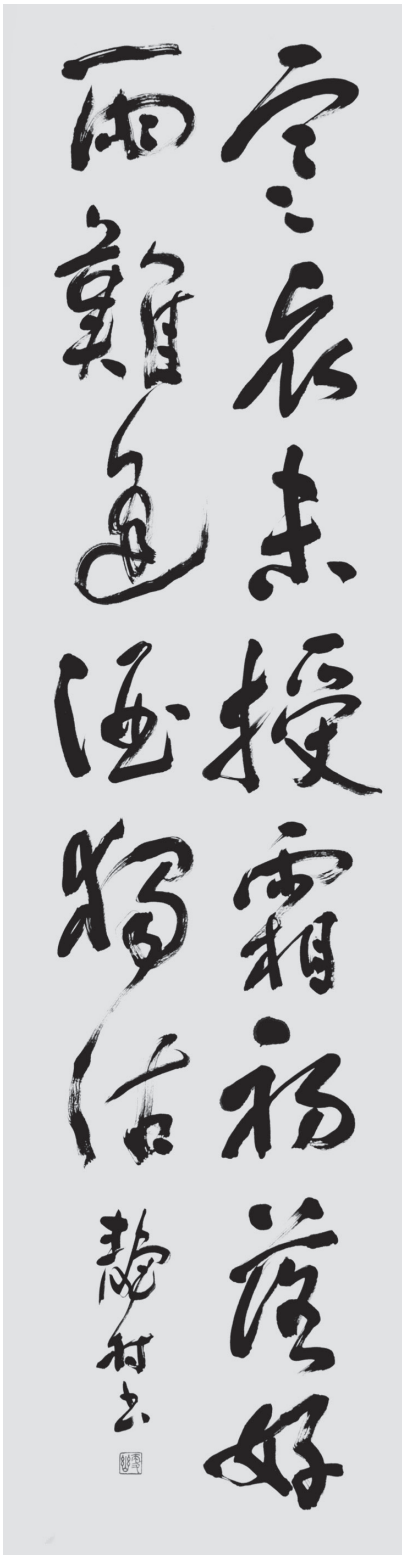
寒衣未授霜初落 好雨難逢酒獨沽 (吳賡詠)
寒衣未だ授けず霜初めて落ち、好雨逢い難く酒独り沽う。



B

鈴木静村先生書

今回は、行草書半々にての作。行の流れを表現する為には、点と縦画を効果的に使います。一行目は「寒」の点から「衣」の点と縦画へ続き、「未」の縦画へつなげ「授」の偏の縦画、「霜」の点・縦画、「初」の点・縦画へと流れを作る。二行目も「難」の縦画から「逢」の一画目に続け、「雨」の之縦から「酒」の三ズイ、「獨」の偏の縦画にも流れを作る。墨継ぎは「初」と「逢」。



点の傾き、大小、付け離し、脈絡等、一点をどう打つかによって一字が一変する。決め手は多様、一工夫の挑戦を期待したい。寒 崩し方多い。字典で詳しく。未 一二画間を広め、米芾借用。授 又、この形古典に多い。初 墨継ぎ、一画目点に留意。好 末画の結び小さく。雨 何紹基借用。酒 墨継ぎ。行草体字典参照のこと。

訳：冬の衣服も用意していないのに、はや霜が降り始める。潤いの雨が降らないので、ひとり酒を買って飲む。

予告 (一月二十二日締切)

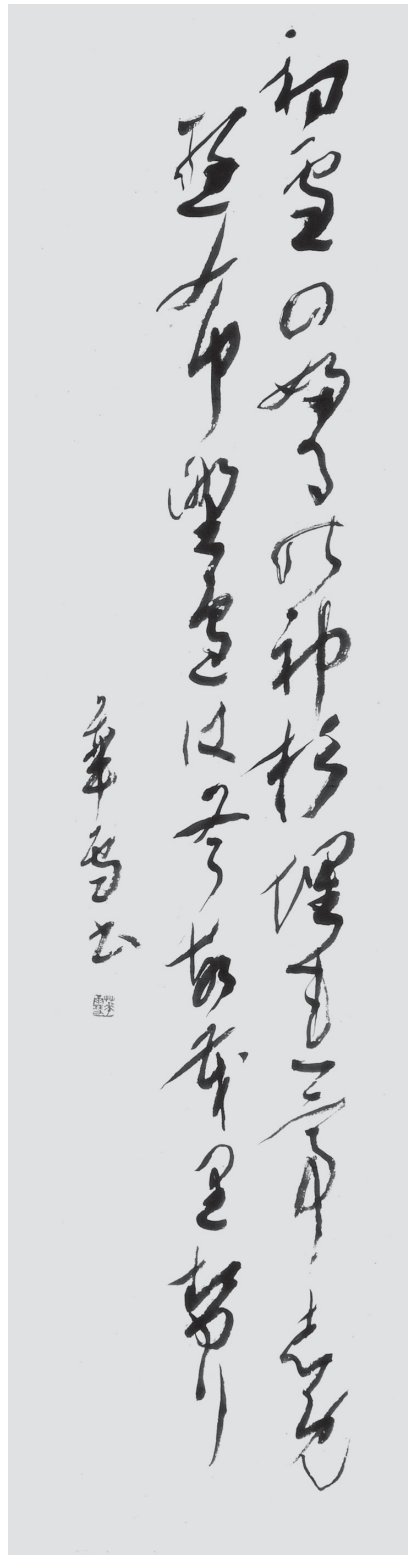
萬壑千巖飛雪

小橋斷岸平溪 (程慶疏)

- ◆注意
- ・条幅部の出品は一人一点 (バーコード券の条漢を○で囲み(1)と記入する。)
- ・二枚目からの出品 (バーコード券の条漢を○で囲み()に何枚目か数字を記入する。出品料550円)

A
平岡華雪先生書

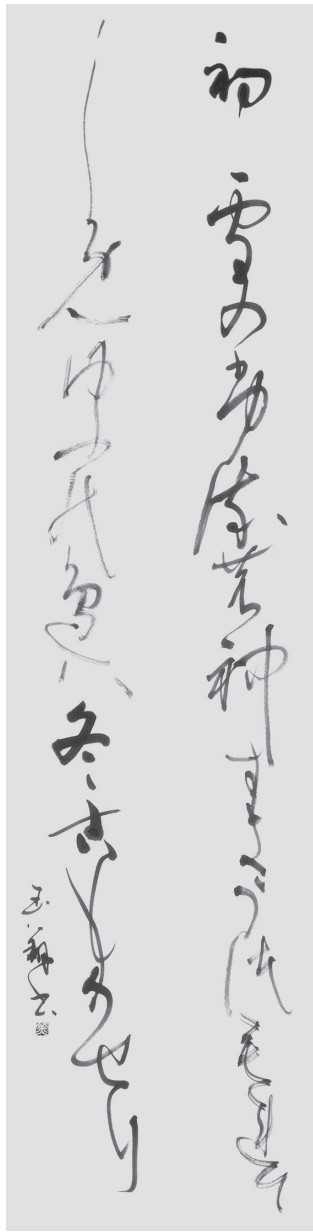
初雪のふるの神杉うづもれてしめゆふ野辺は冬こもりせり(新古今和歌集 藤原長方)
初雪の婦ふる能神杉埋うづもれてしめゆふ野邊は冬故茂里こもりせ勢り



B

福田玉翔先生書

初雪の布ふる流農神す支まう徒毛連つもてし免ゆふ能邊のへ八冬こもりせり



藤原長方

(一一三九〜一一九一年)

平安時代後期の公卿・歌人。小倉百人一首の選者藤原定家の従兄で役職は「権中納言」です。「権」は「代理」の意味ですが、この時に中納言がいたのかどうかは不明です。中納言不在で権中納言だけという場合もあるそうです。

学 び 方

前回に引き続きオーソドックスな半切二行書きにまとめました。一行目は中間で行に幅を持たせて二行目後半で一回墨継ぎをする形です。変体仮名を暗記していないと創作は自由になりませんので、ご自分で変体仮名の元の漢字の楷書・行書・草書と崩して変体仮名になるまでの過程を表にまとめる作業をお勧めします。「しめゆふ」とは木に結ぶ縄のことで「締め結う」です。暑かった夏も過ぎ去ってよいよ冬ごもりの準備が始まったのです。

縦長の半切は、リズムに乗って流れを作ることが大切です。一字ずつの字形にとらわれずに行を自然に流します。また文字の大きさや墨色にも留意して、仮名らしい表現を研究してください。

予 告

(一月二十二日締切)

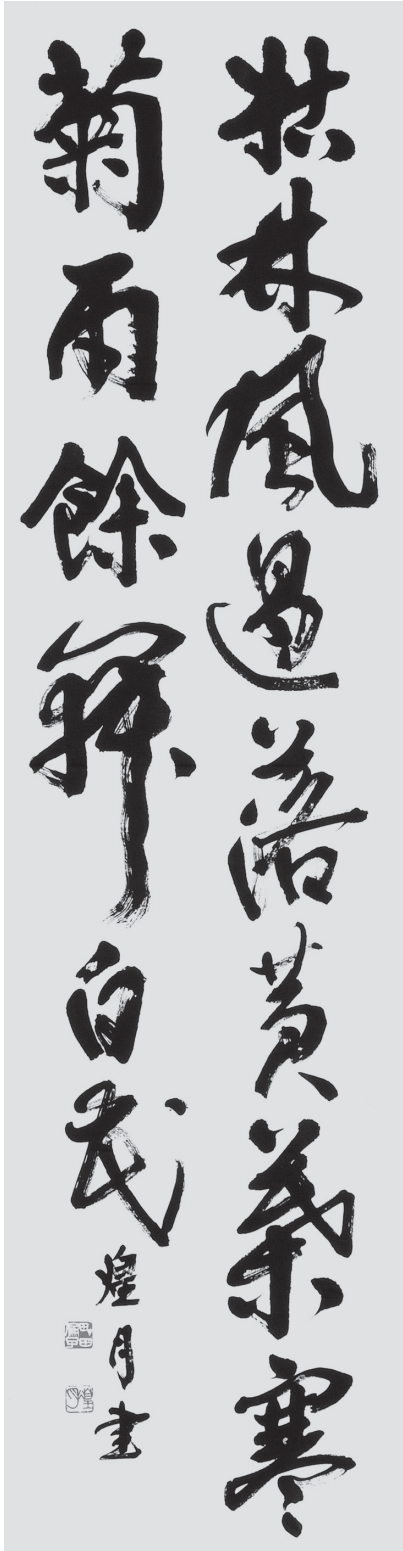
つつましきひとりあるきのさみしさにあぜ菜の香すら知りそめしかな(北原白秋)

◆注意

- ・条幅部の出品は一人一点(バーコード券の条かを○で囲み(1)と記入する。)
- ・二枚目からの出品(バーコード券の条かを○で囲み()に何枚目か数字を記入する。出品料550円)

町田 煌月 先生 書

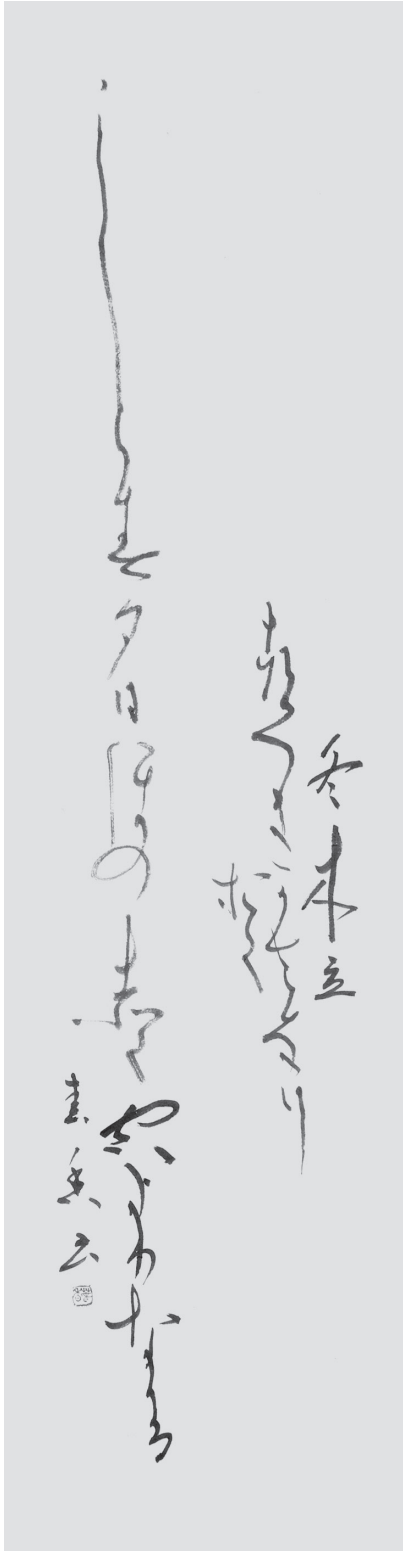
枯林風過落黃葉 寒菊雨餘開白花（朱應辰）
 枯林風過落黃葉落、寒菊雨餘白花開く。



訳：風吹いて林の黄葉をおとしつくし、雨後に菊は白い花を開くのである。

石原 春香 先生 書

冬木立つづきかさなり奥知らず夕日ほの赤く空より流る（窪田空穂）
 冬木立都つ支可さ奈り於久しら春夕日ほの赤く空より流る

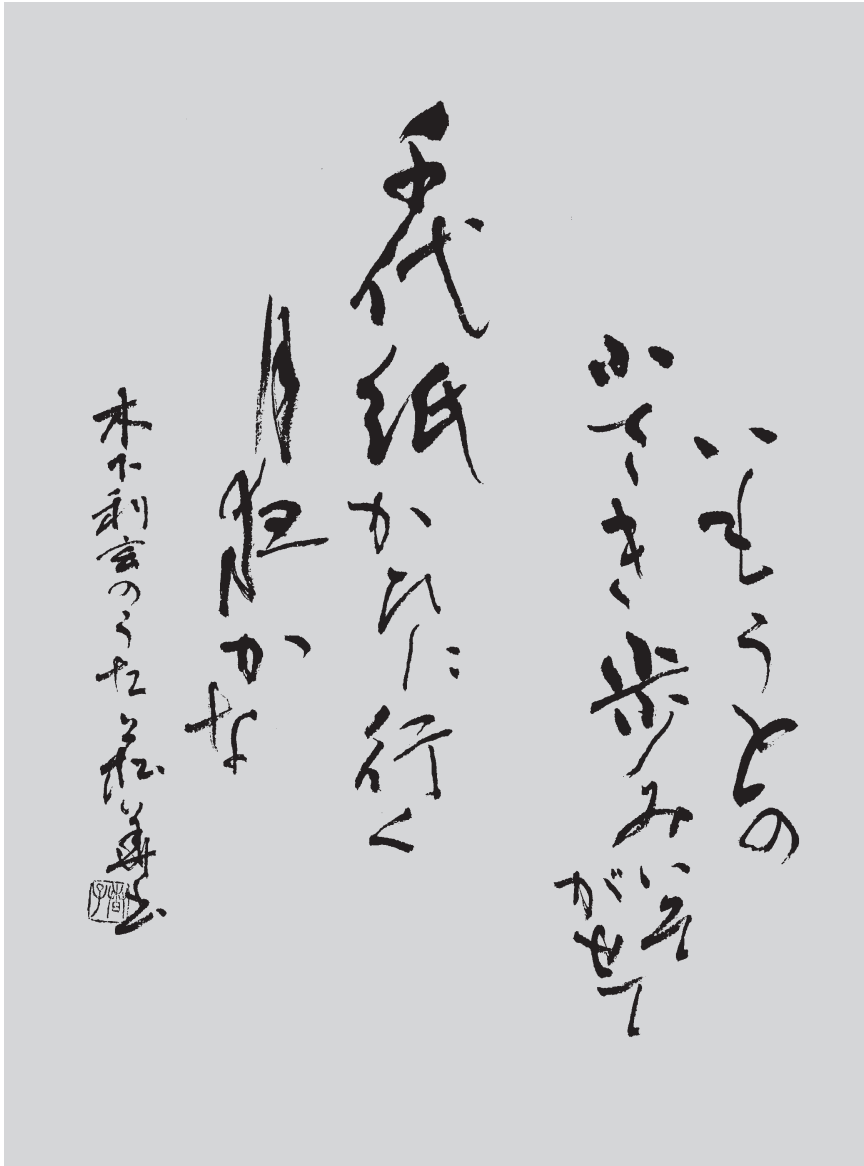


- ◆注意
- ・条幅部の出品は一人一点（バーコード券の条随を○で囲み（1）と記入する。）
 - ・二枚目からの出品（バーコード券の条随を○で囲み（ ）に何枚目か数字を記入する。出品料550円）

小暮 菘華 先生 書

いもうとの小さき歩みいそがせて
千代紙かひに行く月夜かな
(木下利玄)

ほのぼのとした仲の良い兄妹の様子が目に浮かび頬がゆるみます。
初句から三句までは淡々と、四句目「千代紙かひに…」の間に充分余白を設け、墨を入
れ、字も大きく山場としました。



木下利玄(一八八
六〜一九二五)岡
山生まれ。歌人。
東大卒、子爵。佐
佐木信綱に入門。
「心の花」同人。
のち「白樺派」の
歌人として写実的
歌風に独自の領域
を開く。
歌集『銀』『白玉』
『一路』など。

◆注意…はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位)に次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。出品料550円。

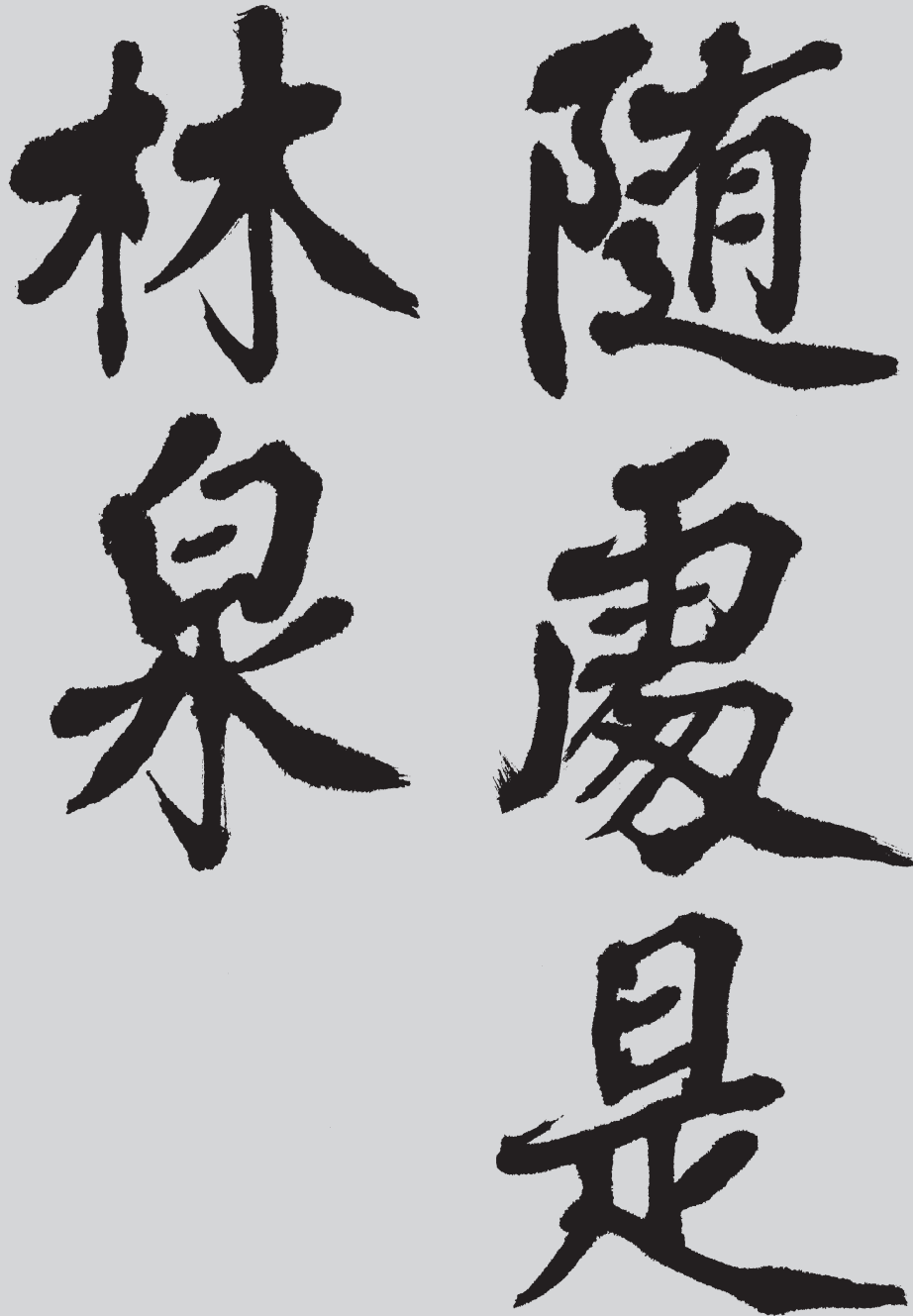
①バーコード券右空欄に漢かと記入 ②支部名または都道府県名 ③氏名または雅号 ④新

平岡華雪先生書

隨處是れ林泉(施樞)
訳：行くところすべてこれ林泉である。

〈右払い、のびやかに〉

五字、右への払いをもつ珍しい課題。しかし案外配字し易い。右辺にハミ出さず、中央での接触なく、のびやかに用筆して貰いたい。「處」の筆順は、左のタテ画が最後。

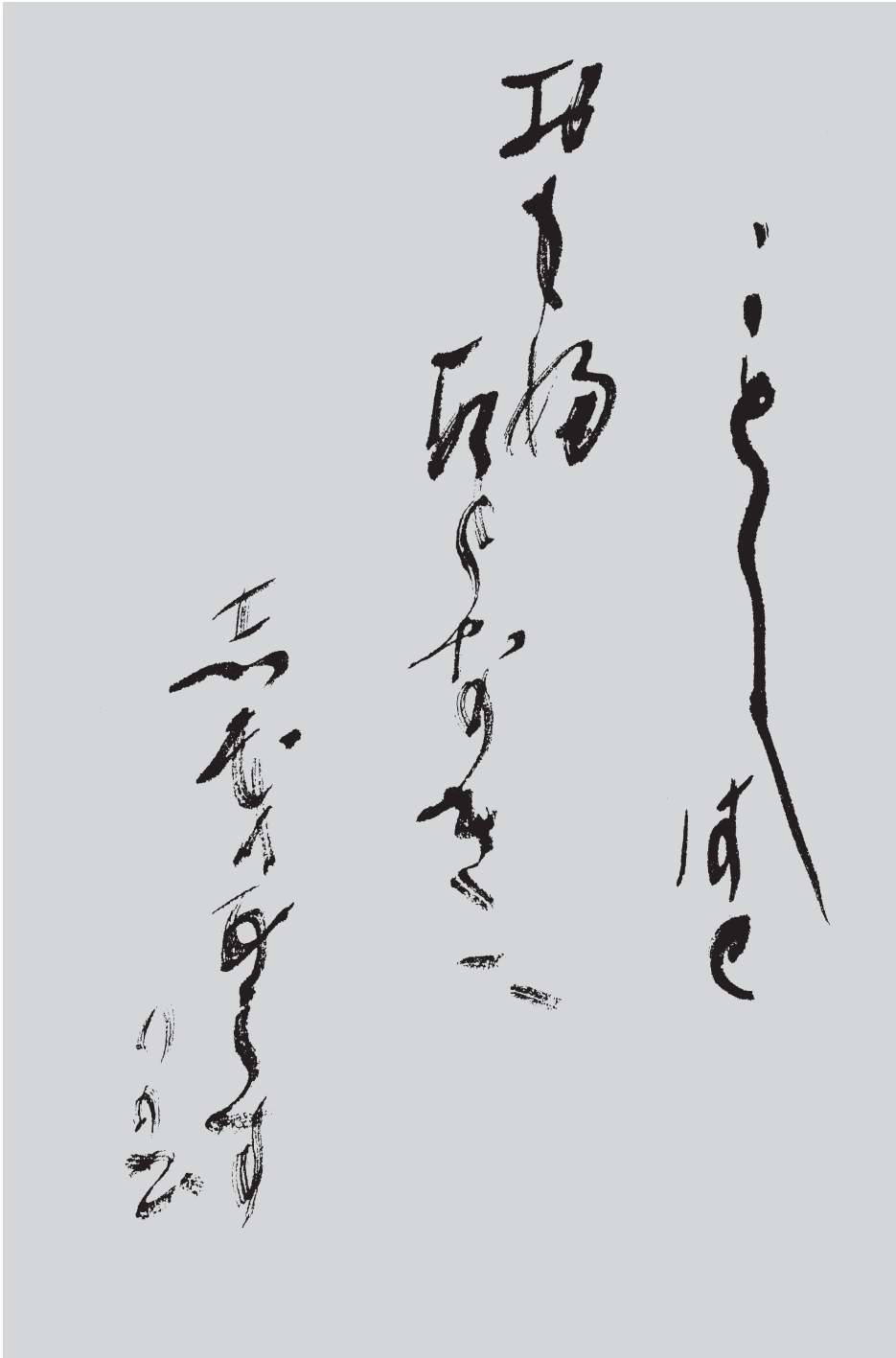


◆注意…はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位)に次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。会員は無料、会員外出品料は460円。

①漢字部 ②支部名または都道府県名 ③氏名または雅号 ④新

平岡華雪先生書

今年はと思ふことなきにしもあらず (子規)
 ことしはおも帰故となき 志茂あらず



〈緩急のリズムを〉

筆意の表われがはっきりした手本を採りました。特に、初歩段階の人は、中の句の動きを味わって下さい。自分の感覚で指書し、そして筆へと移してみる事です。下の句と落款の群も同様試みて下さい。何としても、リズムです。リズムを覚え込む事です。

◆注意…はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位)に次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。会員は無料、会員外出品料は460円。

- ①かな部 ②支部名または都道府県名 ③氏名または雅号 ④新

内藤香瑠先生書

懷此頗有年（陶淵明）
此を懷なつかつて頗すこぶる年とし有り、

懷此頗有年
懷此頗有年
懷此頗有年

香瑠書


訳：そうした考えを抱いてからかなりの年を経たが、

1. 随意部参考として出品してください。
2. 会員外の出品料は460円。

随 意 部 参 考

多 胡 春 葉 先 生 書

朗澄
朗澄朗澄

朗澄

多胡春葉
朗澄

訳：ほがらかにすみわたること。

本 澤 優 香 先 生 書

霜白しもしろきあしたの庭にはの敷松しきまつ葉素足はすあししてわが踏ふみてありけり（尾上柴舟）
霜白しもしろきあ志多の庭農之支松しきまつ葉寸足はすすぢ新あたらてわ可婦かぶ三亭さんていあり介里けり

霜白しもしろきあしたの庭にはの敷松しきまつ葉素足はすあししてわが踏ふみてありけり
霜白しもしろきあ志多の庭農之支松しきまつ葉寸足はすすぢ新あたらてわ可婦かぶ三亭さんていあり介里けり

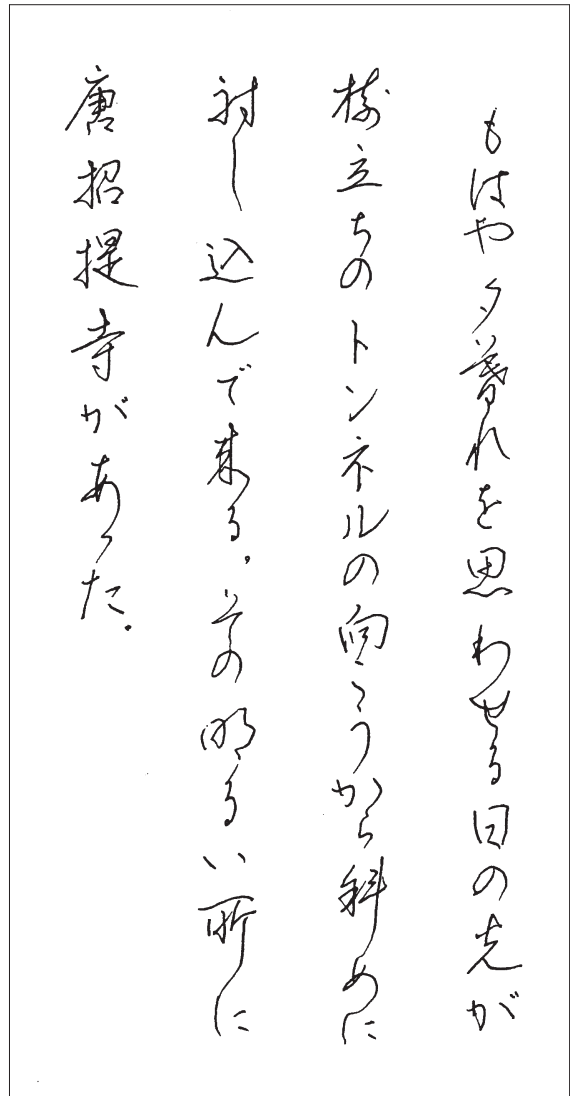
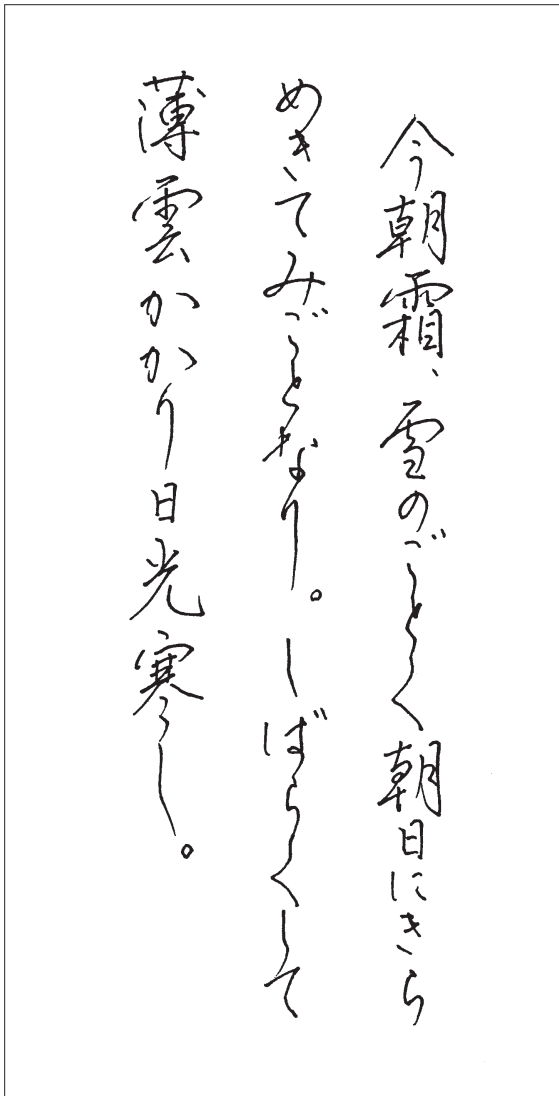
1. 随意部参考として出品してください。
2. 会員外の出品料は460円

赤木典子先生書

川上香蓉先生書

課題 2 (初段階以下)

課題 1 (初段階以上)



課題 1 (初段階以上)

もはや夕暮れを思わせる日の光が樹立ちのトンネルの向こうから斜めに射し込んで来る。その明るい所に唐招提寺があった。

『古寺巡礼』 和辻哲郎

◆注意

- (1) 自分の段級に合った課題を選択。
- (2) ペンまたはボールペン(黒色)を使用のこと。青インクは不可。
- (3) 段級欄は本人が記入(色は黒)はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位) 次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新
- (5) 会員は無料・会員外は四六〇円

課題 2 (初段階以下)

今朝霜、雪のごとく朝日にきらめきてみごとくなり。しばらくして薄雲かかり日光寒し。

『武蔵野』 国木田独歩